

〈調査報告〉

コンピテンシーにみる社会福祉士養成課程実習生の 学修の現状と今後の展望

——コンピテンシーシートを用いた実習生による
自己評価の結果をふまえて——

橋本 有理子*, 柿木 志津江**, 小口 将典**
種村 理太郎***, 清原 舞***, 中島 裕*
得津 慎子****

Ascertaining the present conditions of and future learning prospects
for social work students using a competency assessment :
Based on the results of evaluations of social work students
using a competency sheet

Yuriko Hashimoto, Shizue Kakigi, Masanori Oguchi,
Ritaro Tanemura, Mai Kiyohara, Yutaka Nakajima
and Shinko Tokutsu

要旨：今日の社会福祉士養成教育では、実習生が専門職として必要な能力を獲得するだけでなく、その能力を定期的に評価し、その評価をもとに自らの学びの姿勢を変えていく、主体的な学修が求められている。

そのため、本論では、社会福祉士養成教育の核となる相談援助実習及び相談援助演習に着目し、開発したコンピテンシーシートによる実習生評価をもとに、学修の現状や、シラバスとの有効性、各能力間の関係性を検討する。

その結果、学びの有無により、学修の現状に違いが認められることや、各能力間に関係性が認められた。効果的な学びを実現するためには、「想像力」「表現力」「応用力」の養成や、「継続性」のある学び、「社会的能力」が高まるようなプログラム導入の必要性について示唆された。

Abstract : Active learning demands that trainees not only acquire the necessary abilities of a social worker from today's social work education, but that they also evaluate these abilities regularly and modify their own methods of learning as a result of these self-evaluations.

Consequently, in this paper, we examine field studies and seminars on social work that are at the nucleus of social-work education, present learning conditions, the effectiveness of

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授
**関西福祉科学大学 社会福祉学部 講師
***関西福祉科学大学 社会福祉学部 助教
****関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

syllabi, and the relationships between respective abilities. This is achieved by examining a trainee evaluation performed using a competency sheet that we have developed.

As a result of this study, by comparing those who had completed the educational courses and related subjects with those that had not, it was found that there were differences between their present learning conditions and relationships between their respective abilities. To realize effective learning, it was suggested that the cultivation of “imagination,” “expressiveness,” and “application”; learning using “continuity”; and the introduction of a program that increases “social ability” are necessary.

Key words : コンピテンシー competency 相談援助実習 field studies on social work 相談援助演習 seminars on social work 社会福祉士養成課程実習生 social work students 評価 evaluation

I 研究の背景と目的

経済産業省 (2006)¹⁾によると、1990 年代以降、企業の経営課題が「既存の成功モデルの踏襲」から「新しい価値の創出」に軸足を移すにつれ、人との接触の中で仕事に取り組む能力が必要とされる場面が増えてきている。そして、職場で求められる能力として、人との接触の中で仕事に取り組んでいく上で必要な力は、基礎学力などと並ぶ重要な能力として、従来から多くの人々や企業の間で意識されてきた。しかし、その能力の具体的な定義や育成のための方法等については、半ば「常識」のレベルの事柄と見られ、あまり明確にはされてこなかった。これは、子どもが大人になるプロセスで、家庭や地域社会の中で「自然に」身につけられるものという認識が一般的にあったのではないかと示唆されている。そのため、従来十分意識されていなかった「職場等で求められる能力」をより明確にし、意識的な育成や評価を可能にすることが必要である。

一方、社会福祉の領域に着目すると、2007 年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、社会福祉士の定義には「連絡及び調整機能」が盛り込まれ、その「実践力」がより一層問われるようになった。養成教育に着目すると、多様な特性を持つ実習生が増える一方で、

限られた実習時間のもと、実習生は実践的視点を理解し、能動的に行動できるかが求められている。そのため、実習前・実習後学習では、専門的知識や技能、価値に加えて、基本的学習能力や社会的能力を実習生自身が認識し必要に応じて改善することが求められる。その積み重ねが効果的な実習やその後の専門職にも生きてくるものといえる。このような実状を踏まえ注目されるツールとして、自己評価尺度（コンピテンシーシート）がある。

コンピテンシー (competency) は、1970 年代にハーバード大学の McClelland により提唱された能力評価の概念である。但し、その評価として、知識や技能といった目に見える領域だけでなく、自己概念や価値観など目に見えない領域も含まれている (社団法人日本社会福祉士養成校協会, 2003)²⁾。

今日、コンピテンシーは、産業界のみならず、教育や看護、社会福祉等の対人サービス分野においても、教育効果の測定や専門職の職業能力の指標として用いられている。特に社会福祉士養成課程である大学等においても導入が試みられ、各実習指導段階における実習生の自己コンピテンス・アセスメントの現状や効果、課題の抽出 (池田, 2005)³⁾をはじめ、コンピテンシーシート評価項目の検討 (藤田ら, 2008)⁴⁾などが行われている。一方で、コンピ

テンシーにみる実習生の学修の現状をふまえ、相談援助実習や相談援助演習のシラバスとの有効な関係性を検討している研究はほとんどない。

また、コンピテンシーを高めることは、近年、大学教育の課題としても論じられるようになり、特にコンピテンシー開発に対して「大学教育で獲得可能な能力」として注目されているのは知の運用能力^{註1)}である。これまでの大学は、コンピテンシーの潜在部分の知識・スキルに焦点をあて、その「幅」と「深さ」を問題にしてきたが、コンピテンシーという概念はそれにもう一つ知の構成軸として「運用」という軸を加えている(齋藤, 2012)⁵⁾。そして、本研究で開発を目指しているコンピテンシーシート項目内容の多くも行為動詞であるが、単に得るだけでなく、それをどのように活用できるかに注目している。加藤(2011)⁶⁾も、コンピテンシーの可能性として、行動を通して能力を分析し、その行動を学習することで、有能感を持たせ、自立的に成長できる人的資源に育てることができると述べている。

なお、本研究では、実習生が卒業時に体得すべき専門性を「実践的能力」ととらえている。これは、「基本的学習能力」と「社会的能力」を基盤とし、学内外の学びを通して「価値」をもとに「知識」「技能」を修得していく。それらの一連のプロセスを通して、相談援助実習や就職活動、卒業論文、国家試験対策も含む、在学中の様々な体験・経験による自己研鑽に励み、その体験・経験から得られた養分が「基本的学習能力」と「社会的能力」という土壌をより豊かなものにし、このような循環を経て、最終的には「実践的能力」の体得を位置づけている。このような学びの過程のもと、相談援助実習や相談援助演習のカリキュラムやシラバスをふまえて独自のコンピテンシーシートを作成している。

以上の論考をふまえ、本論では、社会福祉士養成課程の実習生に焦点をあて、相談援助実習

・演習科目をこれから履修する実習生と、既に一年間の相談援助実習・演習科目を履修し、単位を取得している実習生を対象に、コンピテンシーにみる実習生の学修の現状をはじめ、コンピテンシーにみるシラバスの有効性、コンピテンシーの各能力間の関係性を検討する。さらにそれらをふまえ、これからの教育活動のあり方を展望する。

Ⅱ 研究方法

1 調査方法

調査方法は、関西福祉科学大学社会福祉学科で社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ(以下「実習指導Ⅰ」とする)を履修している2年生(160名)及び社会福祉援助技術現場実習指導Ⅲ(以下「実習指導Ⅲ」とする)を履修している3年生(161名)を対象(実習指導Ⅰ・Ⅲの再履修生及び編入生を除く)に、2015年4月の初回の授業で集合調査法を実施した(欠席した実習生は後日個別に対応した)。

本研究協力への同意が得られた2年生は115名、3年生は129名であった。なお、3年生は、後述の「技能」に影響を与えると予想される社会福祉援助技術演習Ⅰ・Ⅱ(以下「演習Ⅰ・Ⅱ」とする)の単位未取得4名を除く125名を分析対象とした。有効回答率は2年生が71.9%、3年生が77.6%であった。

関西福祉科学大学社会福祉学科の社会福祉士養成課程における相談援助実習・演習科目の履修の流れは、図1のとおりである。

なお、開講している社会福祉援助技術現場実習(以下「現場実習」とする)は、原則3年生

- (2年生春) 実習指導Ⅰ・演習Ⅰ
- (2年生秋) 実習指導Ⅱ・演習Ⅱ
- (3年生春) 実習指導Ⅲ
- (3年生夏) 現場実習
- (3年生秋) 実習指導Ⅳ・演習Ⅲ

図1 関西福祉科学大学社会福祉学科における相談援助実習・演習科目の履修の流れ

の夏季休暇時に実施されている。そのため、3 年生の春学期終了までを実習前学習、3 年生の秋学期以降を実習後学習ととらえている。

2 調査項目

本研究では、藤田ら (2008)⁷⁾、社団法人日本社会福祉士養成校協会 (2009)⁸⁾、安井ら (2011)⁹⁾の先行研究をもとに、「基本的学習能力」「社会的能力」「価値」「知識」「技能」「実践的能力」の 6 カテゴリーから構成されている 77 項目のコンピテンシーシートを作成し用いた。

基本的学習能力は 13 項目から構成されており、「講義や会話等のポイントを記録できる」「問題意識をもって学習にのぞむことができる」「文献や資料を収集するために図書館等を活用できる」など、大学での学びを蓄積する上で必要となる能力を指している。

社会的能力は 21 項目から構成されており、「心身ともに適切な状態を維持できる」「自分の行動に責任をもつことができる」「適切な (相手・場面・時に応じた) 話し方ができる」など、社会生活を営む上で必要となる能力を指している。

価値は 8 項目から構成されており、「利用者の人権尊重の具体的方法 (権利擁護、苦情解決) を説明できる」「利用者の人間性や尊厳を重視した関わりを追求することができる」など、専門職の人間性に深く関与する能力を指している。

知識は 16 項目から構成されており、「ソーシャルワークの専門性を説明できる」「他職種とその役割・業務を説明できる」「実習でかかわる制度上の課題や問題点を説明できる」など、実習前学習から必要となる能力を指している。

技能は 8 項目から構成されており、「面接において要約の技法を使うことができる」「アセスメントに基づいた援助計画を作成できる」など、実習前学習から必要となる能力を指している。

実践的能力は 11 項目から構成されており、「個々の利用者に応じた援助を実践できる」「自分の実践結果を適切に評価できる」「地域の福祉・課題に応じて企画・立案できる」など、卒業までに体得することが求められる能力を指している。

回答形式は「まったくできていない (1 点)」から「とてもよくできている (5 点)」までの 5 件法で回答を求めた。なお、本研究では各項目の行動能力に関する現状を分析するために、別途設定している「質問の意味がよくわからない」の項目については分析対象から除外した。

なお、信頼性を表す Cronbach's α 係数を算出したところ、実習指導 I では、基本的学習能力が 0.83、社会的能力が 0.90、価値が 0.91、知識が 0.95、技能が 0.90、実践的能力が 0.92 であった。また、実習指導 III では、基本的学習能力が 0.81、社会的能力が 0.89、価値が 0.83、知識が 0.95、技能が 0.86、実践的能力が 0.87 であった。そのため、信頼性が支持されたと判断し、分析に用いた。

3 分析枠組

「I 研究の背景と目的」でも既に述べたように、本研究では、実習生が卒業時に体得すべき専門性を「実践的能力」ととらえている。これは、「基本的学習能力」と「社会的能力」を基盤とし、学内外の学びを通して「価値」をもとに「知識」「技能」を修得していく。そうした一連のプロセスのなかで、在学中の様々な体験・経験による自己研鑽に励み、その体験・経験から得られた養分が「基本的学習能力」と「社会的能力」という土壌をより豊かなものにし、このような循環を経て、最終的には「実践的能力」の体得を位置づけている。

そのため、まずは「コンピテンシーシートにみる実習生の現状」について、実習指導 I 及び III の実習生を対象に項目分析を行い、実習指導 I・II、演習 I・II のシラバスの有効性を検討した。

また、各段階での学びの程度を確認する必要があるために、「実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生間におけるコンピテンシーの比較」について、t検定を用いて6カテゴリーの分析を行った。

さらに、卒業時に体得すべき専門性として「実践的能力」を位置づけ、「実践的能力」への影響要因を検討するために、「基本的学習能力」「社会的能力」「価値」「知識」「技能」を独立変数とし、「実践的能力」を従属変数とした一括投入法の重回帰分析を行った。

なお、統計分析については、IBM SPSS Statistics 22を用いた。

Ⅲ 倫理的配慮

本研究実施にあたり、実習生に倫理的配慮として、「本研究協力への参加は任意であり、不参加により学生が不利益になることはない」「データは研究目的以外で使用せず、個々の回答は暗号化し、個人が特定されることはない」旨を口頭及び書面にて説明し、同意を得られた実習生に限り、研究対象とした。

なお、本研究は関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得た(14-40)。

Ⅳ 結 果

1 コンピテンシーシート項目分析

(1) コンピテンシーシートにみる実習指導Ⅰを履修している実習生の現状(表1)

①コンピテンシー77項目全体による分析

最も平均値が低い項目は「社会福祉施設・機関・病院に関する統計的情報を説明できる」が1.72、次いで「支援の根拠となる法律について説明できる」が1.74、「実習でかかわる社会資源の状況(インフォーマルなものを含む)について説明できる」が1.78、「社会福祉施設・機関・病院の制度的成り立ちを説明できる」が1.80、「実習でかかわる地域の特性(歴史、文化、人口動態、社会資源、住民福祉活動など)を説明できる」が1.84といずれも「知識」のカテゴリー項目であった。

一方で最も平均値が高い項目は「守秘義務を守ることができる」が4.15、次いで「適切な(相手・場面・時に応じた)あいさつができる」が3.98、「時間厳守で行動できる」が3.96、「自分の行動傾向を理解できる」が3.91、「適切な(相手・場面・時に応じた)身なりができる」が3.86であった。なお、上位5項目のうち後半の4項目は「社会的能力」のカテゴリー項目であった。

②カテゴリー別による分析

基本的学習能力で最も平均値が低い項目は「指導を受ける前に、情報収集や基礎知識の確認などの準備ができる」が2.35、次いで「自分の関心や学習課題を深め、より高い研究課題に結びつけることができる」が2.64、「自分の意見を整理し、言葉で表現できる」及び「現状から問題を発見できる」が3.00であった。一方、最も平均値が高い項目は「社会の問題に関心をもつことができる」が3.63、次いで「問題意識をもって学習にのぞむことができる」が3.23、「講義や会話等のポイントを記録できる」が3.17であった。

社会的能力で最も平均値が低い項目は「プレゼンテーションを的確にすることができる」が2.30、次いで「同じ失敗を繰り返さず行動できる」が3.01、「適切な(相手・場面・時に応じた)文章のやりとりができる」が3.20であった。一方、最も平均値が高い項目は「適切な(相手・場面・時に応じた)あいさつができる」が3.98、次いで「時間厳守で行動できる」が3.96、「自分の行動傾向を理解できる」が3.91であった。

価値で最も平均値が低い項目は「利用者の人権尊重の具体的方法(権利擁護、苦情解決)を説明できる」が2.35、次いで「支援やサービスの意義は個々の利用者によって異なることを説明できる」が2.77、「受けとめにくい利用者の言動・話題・行動・状況・場面などに、自分なりに向き合うことができる」が3.08であった。一方、最も平均値が高い項目は「ソーシャルワ

ーカーとしての価値観や行動の基準を身につけるための努力ができる」が 3.43、次いで「その人らしい生活に必要な支援の意義について考えることができる」が 3.20、「利用者の人間性や尊厳を重視した関わりを追求することができる」及び「利用者が追求している生き方や自己実現の方向性について考えることができる」がいずれも 3.16 であった。

知識で最も平均値が低い項目は「社会福祉施設・機関・病院に関する統計的情報を説明できる」が 1.72、次いで「支援の根拠となる法律について説明できる」が 1.74、「実習でかかわる社会資源の状況（インフォーマルなものを含む）について説明できる」が 1.78 であった。一方、最も平均値が高い項目は「ニーズとは何かを説明できる」が 2.86、次いで「ソーシャルワークの専門性を説明できる」が 2.38、「社会全体のニーズと社会問題を説明できる」が 2.28 であった。なお、「知識」のカテゴリー項目 16 項目のうち 11 項目が 1 点台であった。

技能で最も平均値が低い項目は「アセスメントに基づいた援助計画を作成できる」が 2.01、次いで「利用者の家族のニーズをアセスメントできる」が 2.26、「利用者のニーズをアセスメントできる」が 2.29 であった。一方、最も平均値が高い項目は「面接において人の話を傾聴することができる」が 3.39、次いで「面接において感情を的確に返すことができる」が 2.85、「面接において質問を的確にすることができる」が 2.54 であった。

実践的能力で最も平均値が低い項目は「地域の福祉課題に応じて企画・立案できる」が 2.36、次いで「ソーシャルワークに関する理論を用いて実践できる」が 2.43、「グループ理論に基づいた専門職としての役割を果たすことができる」が 2.48 であった。一方、最も平均値が高い項目は「守秘義務を守ることができる」が 4.15、次いで「自己覚知に向けて努力できる」が 3.56、「利用者を的確に観察できる」が 3.11 であった。

(2) コンピテンシーシートにみる実習指導Ⅲを履修している実習生の現状 (表 1)

①コンピテンシー 77 項目全体による分析

最も平均値が低い項目は「社会福祉施設・機関・病院に関する統計的情報を説明できる」が 2.19、次いで「社会福祉施設・機関・病院の制度的成り立ちを説明できる」が 2.30、「支援の根拠となる法律について説明できる」が 2.38、「ソーシャルワーク実践とケアワーク実践、保育実践等の違いを説明できる」及び「他職種とその役割・業務を説明できる」が 2.39 といずれも「知識」のカテゴリー項目であった。

一方で最も平均値が高い項目は「守秘義務を守ることができる」が 4.29、次いで「時間厳守で行動できる」が 4.06、「適切な（相手・場面・時に応じた）あいさつができる」が 4.02、「自分の性格を理解できる」が 3.95、「適切な（相手・場面・時に応じた）身なりができる」が 3.93 であった。なお、上位 5 項目のうち後半の 4 項目は「社会的能力」のカテゴリー項目であった。

②カテゴリー別による分析

基本的学習能力で最も平均値が低い項目は「指導を受ける前に、情報収集や基礎知識の確認などの準備ができる」が 2.66、次いで「自分の意見を整理し、言葉で表現できる」が 2.99、「自分の関心や学習課題を深め、より高い研究課題に結びつけることができる」が 3.03 であった。一方、最も平均値が高い項目は「社会の問題に関心をもつことができる」が 3.77、次いで「事実と自分の意見を区別して記録できる」が 3.56、「講義や会話等のポイントを記録できる」が 3.45 であった。

社会的能力で最も平均値が低い項目は「プレゼンテーションを的確にすることができる」が 2.72、次いで「同じ失敗を繰り返さず行動できる」が 3.14、「適切な（相手・場面・時に応じた）文章のやりとりができる」が 3.24 であった。一方、最も平均値が高い項目は「時間厳守で行動できる」が 4.06、次いで「適切な（相手

橋本有理子他：コンピテンシーにみる社会福祉士養成課程実習生の学修の現状と今後の展望

・場面・時に応じた) あいさつができる」が4.02、「自分の性格を理解できる」が3.95であった。

価値で最も平均値が低い項目は「利用者の人権尊重の具体的方法(権利擁護、苦情解決)を

説明できる」が2.62、次いで「支援やサービスの意義は個々の利用者によって異なることを説明できる」が3.05、「支援が利用者の人間形成や成長、自己実現にもたらす意味を考えることができる」が3.39であった。一方、最も平均

表1 コンピテンシーにみる実習生の現状

カテゴリ	項目	実習指導Ⅰ			実習指導Ⅲ		
		人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差
基本的学習能力	指導を受ける前に、情報収集や基礎知識の確認などの準備ができる	114	2.35	0.892	124	2.66	0.892
	学習や自主活動の進め方を自分自身の判断で決定できる	115	3.01	0.987	125	3.14	0.922
	講義や会話等のポイントを記録できる	115	3.17	0.927	125	3.45	0.818
	事実と自分の意見を区別して記録できる	115	3.15	1.002	124	3.56	0.829
	自分の意見を整理し、言葉で表現できる	115	3.00	0.927	125	2.99	0.938
	社会の問題に関心をもつことができる	115	3.63	0.932	125	3.77	0.805
	現状から問題を発見できる	113	3.00	0.835	125	3.38	0.801
	問題意識をもって学習にのぞむことができる	114	3.23	0.842	125	3.44	0.745
	文献や資料を収集するために図書館等を活用できる	115	3.12	1.125	125	3.30	1.064
	社会福祉問題に関する文献・資料等を集めることができる	115	3.07	1.032	125	3.26	0.888
	自分の関心や学習課題を深め、より高い研究課題に結びつけることができる	115	2.64	0.919	125	3.03	0.822
	自分の関心領域を明らかにするために行動できる	114	3.11	1.062	124	3.28	0.832
	自分の関心や課題にそった自主的活動(サークル、ボランティア、地域活動)を行うことができる	114	3.16	1.110	125	3.30	1.157
社会的能力	プレゼンテーションを的確にすることができる	115	2.30	0.908	125	2.72	0.921
	時間厳守で行動できる	114	3.96	1.064	123	4.06	0.978
	自分の性格を理解できる	115	3.84	0.844	123	3.95	0.931
	自分の行動傾向を理解できる	114	3.91	0.747	123	3.86	0.761
	自分のストレスを解消できる	115	3.58	1.051	124	3.51	1.186
	心身ともに適切な状態を維持できる	114	3.28	1.109	124	3.41	1.036
	困難な状況に耐えることができる	115	3.50	0.862	125	3.50	0.997
	自分を変革していくために努力できる	115	3.36	0.993	125	3.31	0.928
	自分の行動に責任をもつことができる	115	3.64	0.890	125	3.80	0.783
	同じ失敗を繰り返さず行動できる	115	3.01	0.800	125	3.14	0.790
	自分が他者に与える影響を理解できる	113	3.42	0.821	124	3.40	0.816
	相手の状況を汲んで行動できる	115	3.53	0.787	120	3.69	0.696
	誰とも協調性をもって接することができる	115	3.38	0.923	125	3.45	0.979
	周囲の人と円滑な人間関係を築くことができる	115	3.42	0.927	125	3.58	0.845
	適切な(相手・場面・時に応じた)身なりができる	115	3.86	0.793	123	3.93	0.748
	適切な(相手・場面・時に応じた)あいさつができる	115	3.98	0.737	123	4.02	0.671
	適切な(相手・場面・時に応じた)自己紹介ができる	114	3.47	0.933	125	3.69	0.756
	適切な(相手・場面・時に応じた)文章のやりとりができる	115	3.20	0.910	125	3.24	0.846
	適切な(相手・場面・時に応じた)話し方ができる	115	3.46	0.901	125	3.66	0.804
様々な体験を自分なりに受け止めることができる	114	3.75	0.860	125	3.83	0.619	
様々な体験を自らの行動につなげることができる	115	3.43	0.909	125	3.46	0.778	

価値	利用者の人権尊重の具体的方法（権利擁護、苦情解決）を説明できる	114	2.35	0.950	123	2.62	0.928
	ソーシャルワーカーとしての価値観や行動の基準を身につけるための努力ができる	115	3.43	0.838	124	3.46	0.869
	支援やサービスの意義は個々の利用者によって異なることを説明できる	115	2.77	0.992	125	3.05	0.999
	受けとめにくい利用者の言動・話題・行動・状況・場面などに、自分なりに向き合うことができる	115	3.08	0.929	125	3.43	0.892
	利用者の人間性や尊厳を重視した関わりを追求することができる	115	3.16	0.961	125	3.44	0.807
	利用者が追求している生き方や自己実現の方向性について考えることができる	115	3.16	0.988	124	3.52	0.738
	その人らしい生活に必要な支援の意義について考えることができる	114	3.20	0.979	125	3.58	0.765
	支援が利用者の人間形成や成長、自己実現にもたらす意味を考えることができる	115	3.09	0.923	124	3.39	0.793
知識	社会全体のニーズと社会問題を説明できる	115	2.28	0.854	125	2.58	0.891
	ソーシャルワークの専門性を説明できる	115	2.38	0.854	125	2.73	0.865
	ソーシャルワーク実践とケアワーク実践、保育実践等との違いを説明できる	115	2.10	0.831	125	2.39	0.906
	他職種とその役割・業務を説明できる	112	2.14	0.889	125	2.39	0.906
	チームアプローチの方法を説明できる	111	1.89	0.824	124	2.47	0.941
	社会福祉施設・機関・病院の制度的成り立ちを説明できる	115	1.80	0.728	124	2.30	0.796
	社会福祉施設・機関・病院に関する統計的情報を説明できる	114	1.72	0.698	124	2.19	0.803
	社会福祉施設・機関・病院における社会福祉専門職の担う職務を説明できる	115	1.95	0.815	125	2.43	0.836
	社会福祉施設・機関・病院での援助に必要な知識を説明できる	115	1.93	0.746	125	2.49	0.819
	社会福祉施設・機関・病院での実践方法（相談援助・ケアマネジメント・介護・保育・ネットワーキングなど）を説明できる	114	1.88	0.811	125	2.42	0.786
	実習でかかわる施設・機関・地域・団体等の課題を説明できる	115	1.86	0.837	125	2.64	0.856
	実習でかかわる制度上の課題や問題点を説明できる	113	1.86	0.833	124	2.47	0.821
	支援の根拠となる法律について説明できる	114	1.74	0.799	124	2.38	0.832
	実習でかかわる地域の特性（歴史、文化、人口動態、社会資源、住民福祉活動など）を説明できる	114	1.84	0.918	124	2.52	0.906
	実習でかかわる社会資源の状況（インフォーマルなものを含む）について説明できる	114	1.78	0.849	124	2.49	0.860
ニーズとは何かを説明できる	114	2.86	1.021	124	3.48	0.924	
技能	面接において人の話を傾聴することができる	114	3.39	0.992	124	3.85	0.762
	面接において感情を的確に返すことができる	114	2.85	0.943	122	3.52	0.795
	面接において要約の技法を使うことができる	112	2.31	0.881	124	2.89	0.904
	面接において質問を的確にすることができる	114	2.54	0.933	124	2.97	0.845
	利用者のニーズをアセスメントできる	112	2.29	0.915	124	2.97	0.845
	利用者の家族のニーズをアセスメントできる	112	2.26	0.898	124	2.85	0.871
	ケースに関する事実を客観的・主観的の両側面からとらえることができる	113	2.37	1.019	122	3.05	0.842
	アセスメントに基づいた援助計画を作成できる	114	2.01	0.887	124	2.70	0.836
実践的能力	守秘義務を守ることができる	114	4.15	0.989	121	4.29	0.779
	専門職としての倫理的な行動をとることができる	113	3.04	1.180	124	3.46	0.923
	自己覚知に向けて努力できる	114	3.56	0.960	124	3.90	0.844
	利用者を的確に観察できる	114	3.11	0.935	124	3.48	0.841
	個々の利用者に応じた援助を実践できる	114	2.71	1.037	124	3.22	0.802
	専門的な立場から自分の援助（支援）を振り返ることができる	114	2.73	1.033	124	3.21	0.839
	自分の実践結果を適切に評価できる	114	2.77	1.073	123	3.20	0.796
	ソーシャルワークに関する理論を用いて実践できる	114	2.43	0.940	124	2.86	0.810
	グループ理論に基づいた専門職としての役割を果たすことができる	109	2.48	0.958	124	2.94	0.779
	援助計画に基づいて実践できる	111	2.66	0.986	122	3.04	0.857
地域の福祉課題に応じて企画・立案できる	109	2.36	0.958	121	2.89	0.902	

値が高い項目は「その人らしい生活に必要な支援の意義について考えることができる」が3.58、次いで「利用者が追求している生き方や自己実現の方向性について考えることができる」が3.52、「ソーシャルワーカーとしての価値観や行動の基準を身につけるための努力ができる」が3.46であった。

知識で最も平均値が低い項目は「社会福祉施設・機関・病院に関する統計的情報を説明できる」が2.19、次いで「社会福祉施設・機関・病院の制度的成り立ちを説明できる」が2.30、「支援の根拠となる法律について説明できる」が2.38であった。一方、最も平均値が高い項目は「ニーズとは何かを説明できる」が3.48、次いで「ソーシャルワークの専門性を説明できる」が2.73、「実習でかかわる施設・機関・地域・団体等の課題を説明できる」が2.64であった。なお、「知識」のカテゴリー項目16項目のうち15項目が2点台であった。

技能で最も平均値が低い項目は「アセスメントに基づいた援助計画を作成できる」が2.70、次いで「利用者の家族のニーズをアセスメントできる」が2.85、「面接において要約の技法を使うことができる」が2.89であった。一方、最も平均値が高い項目は「面接において人の話を傾聴することができる」が3.85、次いで「面接において感情を的確に返すことができる」が3.52、「ケースに関する事実を客観的・主観的の両側面からとらえることができる」が3.05であった。

実践的能力で最も平均値が低い項目は「ソーシャルワークに関する理論を用いて実践できる」が2.86、次いで「地域の福祉課題に応じて企画・立案できる」が2.89、「グループ理論に基づいた専門職としての役割を果たすことができる」が2.94であった。一方、最も平均値が高い項目は「守秘義務を守ることができる」が4.29、次いで「自己覚知に向けて努力できる」が3.90、「利用者を的確に観察できる」が3.48であった。

2 実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生間におけるコンピテンシーの比較

実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生間におけるコンピテンシーの現状を明らかにするために、実習指導Ⅰ・Ⅲを独立変数、コンピテンシーシート内の6カテゴリー（「基本的学習能力」「社会的能力」「価値」「知識」「技能」「実践的能力」）を従属変数とし、t検定で分析を行った。

その結果、実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生間において、社会的能力を除く5カテゴリーで有意差が認められた（基本的学習能力： $t(229) = -3.20$, $p < .01$ 、価値： $t(212.721) = -3.17$, $p < .01$ 、知識： $t(225) = -6.26$, $p < .001$ 、技能： $t(213.071) = -6.79$, $p < .001$ 、実践的能力： $t(185.378) = -4.51$, $p < .001$ ）（表2）。

3 実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生別にみる「実践的能力」への影響要因

実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生別にみる「実践的能

表2 実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生間におけるコンピテンシーの比較（t検定）

	実習指導Ⅰ			実習指導Ⅲ			t 値
	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	
基本的学習能力	109	39.76	7.28	122	42.63	6.36	-3.20**
社会的能力	109	73.61	10.90	116	75.46	10.01	-1.32
価値	113	24.21	5.88	121	26.41	4.63	-3.17**
知識	106	32.02	10.33	121	40.74	10.58	-6.26***
技能	110	20.07	5.75	120	24.84	4.80	-6.79***
実践的能力	103	31.93	8.35	118	36.44	6.16	-4.51***

両側検定

*** $p < .001$, ** $p < .01$

力」への影響要因を明らかにするために、「実践的能力」を除く 5 カテゴリー（「基本的学習能力」「社会的能力」「価値」「知識」「技能」）を独立変数、「実践的能力」を従属変数とする重回帰分析を行った。なお、重回帰分析の結果については、VIF の値から多重共線性の問題はないと判断した。

その結果、実習指導 I では、「価値」「技能」の程度が高いほうが「実践的能力」への程度も高いことが示された（価値： $\beta = .298$, $p < .01$ 、技能： $\beta = .546$, $p < .001$ ）（表 3）。

実習指導 III では、「社会的能力」「価値」「技能」の程度が高いほうが「実践的能力」への程度も高いことが示された（社会的能力： $\beta = .186$, $p < .05$ 、価値： $\beta = .327$, $p < .001$ 、技能： $\beta = .472$,

表 3 実習指導 I の実習生にみる実践的能力への影響要因（重回帰分析）

カテゴリー	非標準化係数	標準化係数(β)	VIF
基本的学習能力	.067	.058	2.050
社会的能力	-.035	-.046	2.573
価値	.415	.298**	2.518
知識	.057	.068	2.221
技能	.787	.546***	2.424
F 値	32.936***		
R	.819		
R ²	.670		
調整済み R ²	.650		

*** $p < .001$, ** $p < .01$

表 4 実習指導 III の実習生にみる実践的能力への影響要因（重回帰分析）

カテゴリー	非標準化係数	標準化係数(β)	VIF
基本的学習能力	.006	.006	1.622
社会的能力	.108	.186*	1.721
価値	.444	.327***	1.857
知識	-.007	-.013	1.795
技能	.591	.472***	2.034
F 値	41.777***		
R	.828		
R ²	.685		
調整済み R ²	.669		

*** $p < .001$, * $p < .05$

$p < .001$ ）（表 4）。

V 考 察

1 コンピテンシーシート項目分析

①コンピテンシー 77 項目全体による分析

実習指導 I 及び III の実習生に共通する事項として、「知識」のカテゴリー項目が他のカテゴリー項目より全般的に数値が低いことがあげられる。「知識」のカテゴリー項目の文尾はすべて「説明できる」にしているため、「理解はしていても他者に説明できるほどではない」という立ち位置から回答している可能性もうかがえる。

池田 (2005)¹⁰は、実習指導開始時期は 1.5 以下と「知識」の数値が低かったが、実習終了後には 4.0 前後まで上昇し、実習経験と実習の授業展開による効果であると述べている。そのため、本研究でも、実習経験と実習前・実習後学習の展開による今後の数値の動きを注視する必要がある。

対人援助の根幹となる「守秘義務の遵守」は実習指導 I・III の実習生ともに最も高く、その他は「社会的能力」のカテゴリー項目であるが、「時間厳守」に加えて、「あいさつ」や「身なり」といった他者から見えるもの、「自分の行動傾向の理解」や「自分の性格の理解」といった対人援助で必要となる「自己覚知」につながるものが上位を占めている。

関西福祉科学大学社会福祉学科では、演習 I で「自己覚知」「他者理解」「自我理解」などがシラバスに盛り込まれていることもあり、大学生活前半のうちから自分を見つめる機会を提供されていることが結果に反映されているとも解釈できる。

②カテゴリー別による分析

実習指導 I・II、演習 I・II をはじめ、国家試験関連の講義科目への受講により、社会的能力の一部の項目を除き、それ以外のすべての項目では、実習指導 I の実習生よりも実習指導 III の実習生のほうが数値は高かった。特に、「知

識」及び「技能」では両者間の差の開きが顕著であり、履修科目の貢献度が推察できる。

ここからは、シラバスや教育活動への今後の展望を見出すために、カテゴリー別において、特に平均値が低い項目を中心に考察する。

「基本的学習能力」及び「社会的能力」においては、平均値が低い項目について、実習指導Ⅰ・Ⅲともに同じ項目から見えてくる要素として、行動する前に置かれている状況を想像できる「想像力」をはじめ、口頭や書面により表現ができる「表現力」、得られた知識や経験をもとに次の段階の課題へ結びつけられる「応用力」の不足が見られ、このような力を教育活動の過程においてより一層高めることが求められる。

「価値」においては、演習Ⅰで「ソーシャルワーカーの価値及び倫理」を学習していることや、国家試験関連の講義科目への受講により、実習指導Ⅰの実習生よりも実習指導Ⅲの実習生のほうが数値は高かった。しかし、「利用者の人権尊重の具体的方法（権利擁護、苦情解決）を説明できる」の項目は、実習指導Ⅲでも依然として2点台であることから、利用者の人権尊重は理解できても、利用者の置かれている状況への「想像力」や、よりわかりやすい表現で端的に説明できる「表現力」、権利擁護や苦情解決の知識を実践形式に置き換えられる「応用力」の不足も示唆される。

「知識」においては、平均値が低い項目について、実習指導Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱをはじめ、国家試験関連の講義科目への受講により、「法制度の概要」や「実習先等に関する統計的情報の理解」を学習しているため、実習指導Ⅰの実習生よりも実習指導Ⅲの実習生のほうが数値は高かった。しかし、実習指導Ⅲで平均値の低い項目として提示している項目すべてが依然として2点台前半であることから、理解度を定期的に確認し、必要に応じて個別に学習させ、自身の中に知識を定着させることが求められる。

「技能」においては、平均値が低い項目につ

いて、演習Ⅰ・Ⅱで「相談援助技術」や「相談援助の過程の理解（アセスメントも含む）」を学習していることや、国家試験関連の講義科目への受講により、実習指導Ⅰの実習生よりも実習指導Ⅲの実習生のほうが数値は高かった。しかし、実習指導Ⅲで平均値の低い項目として提示している項目すべてが依然として2点台であることから、現場実習の中でも実施されることが増えてきた「援助計画の作成」を実習前学習の段階で、相談援助実習・演習科目の中に取り入れる必要がある。また、利用者支援だけでなく、「家族支援への視点」や「相談援助技術の実際」のさらなる導入についても、相談援助実習・演習科目や国家試験関連の講義科目の内容として検討することが求められる。

「実践的能力」においては、平均値が低い項目について、実習指導Ⅰ・Ⅲともに同じ項目であった。いずれの項目も現場実習で実践できる内容であるため、現場実習開始直前と終了直後、2年間にわたる実習指導の最終段階におけるそれぞれの数値に注目することにより、現場実習や実習後学習の効果測定 of 指標になるものといえる。

2 実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生間におけるコンピテンシーの比較

実習指導Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱを既に履修し単位を取得している実習指導Ⅲの実習生は、これから履修する実習指導Ⅰの実習生より、「基本的学習能力」「価値」「知識」「技能」「実践的能力」の程度が高いことから、実習指導Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱを含む実習前学習内容は一定の効果をもたらすものと考察できる。藤田ら(2008)¹¹⁾も、2年生～4年生の3学年間でコンピテンシー評価を比較しているが、「実践」「知識・理解」は2年生よりも3年生のほうが有意に高い結果であり、4年生も含めた結果からの考察として、専門教育や実習が社会福祉士専門職に関するコンピテンシーの向上と促進に貢献していることについて言及している。

なお、「社会的能力」のみ有意差が認められなかったことから、社会的能力はこれまでの人生で培ってきたものが大きく影響する能力と推察される。藤田ら (2008) の研究でも 2 年生と 3 年生の間で有意差が認められなかったが、4 年生と 2・3 年生との間には有意差が認められ、4 年生が有意に高いことから、現場実習からもたらされる影響や効果も期待できる。

3 実習指導Ⅰ・Ⅲの実習生別にみる実践的能力への影響要因

卒業時に体得すべき専門性として位置づけている「実践的能力」への影響要因として、実習指導Ⅰでは「価値」「技能」が、実習指導Ⅲでは「社会的能力」「価値」「技能」が認められた。

「基本的学習能力」と「社会的能力」を基盤に、学内外の学びを通して「価値」から「知識」、「知識」から「技能」を体得し、その後も在学中の様々な体験・経験による自己研鑽に励み、最終的には「実践的能力」の体得を位置づけていることから、「実践的能力」の影響要因として「価値」及び「技能」に焦点を当てることは、合わせて「知識」を高めることも求められる。

また、実習指導Ⅲでは「社会的能力」も「実践的能力」の影響要因として位置づけられている。実習指導Ⅰ・Ⅱで、施設見学や夏季休暇時の見学など、学外での学びが含まれる時期であるため、そこでは社会性が問われることになる。さらに、本研究での「社会的能力」は、自己の状態を良好に維持できることや、他者との関係性を円滑に構築できることも指しているため、主体的な学びの姿勢とそれに伴う周囲からの豊富な情報量の獲得も予想される。したがって、「社会的能力」が高いことは専門性の学びが効果的に得られやすく、「実践的能力」にも影響を与えるものと推察される。

経済産業省 (2006)¹²⁾の報告では、社会人基礎力は個人間のばらつきが拡大する方向にある

と述べられていることから、社会人基礎力と一部重複している「社会的能力」もその傾向にあることは容易に想像できる。したがって、養成校として、現場実習にかかわる以前から、教育活動の中で、実習生の社会性がより一層高まるような働きかけや取り組みを意図的に取り入れる必要性が示唆される。

VI 結 論

本論では、社会福祉士養成課程における相談援助実習・演習科目をこれから履修する実習生と、既に一年間の相談援助実習・演習科目を履修し、単位を取得している実習生を対象に、コンピテンシーにみる実習生の学修の現状をはじめ、コンピテンシーにみるシラバスの有効性、コンピテンシーの各能力間の関係性を検討した上で、これからの教育活動のあり方を展望した。

相談援助実習・演習科目を履修し単位を取得することによって、そのシラバスに関連する項目の数値は確かに高くなっているが、同カテゴリー内で依然として平均値が他の項目よりも低い項目に着目しその共通項を見い出すと、学びの奥行きと広がり意味する「想像力」や「応用力」とそのツールとなる「表現力」の養成に加えて、理解度を定期的に確認し必要に応じて個別に学習させるなどの「継続的」な学習が求められる。

また、各分野における現場実習の内容として導入されることが増えてきた「援助計画の作成」は、実習前学習の段階で相談援助実習・演習科目の中に積極的に取り入れる必要がある。さらに、「家族支援への視点」や「相談援助技術の実際」の学びについて、実習前学習として、相談援助実習・演習科目や国家試験関連の講義科目で「継続的」な実践が求められる。

そして、卒業時に体得すべき専門性である「実践的能力」への影響要因として、「価値」「技能」が認められたが、実習指導Ⅲの実習生に限り「社会的能力」も認められた。この「社

会的能力」については個人差が推察できることから、実習前学習の段階から教育活動の中で実習生の社会性がより高まるようなプログラムを意図的に導入することが示唆される。

このように、相談援助実習や相談援助演習のカリキュラムやシラバスをふまえて作成したコンピテンシーシートによる実習生評価から、実習生の効果的な学びの実現に向けた要点を提示した。その上で、実習生の効果的な学びの実現として、実習生が見聞した学びを一面的にとらえることなく、複眼的に眺め、自らに問いかけ続ける姿勢が重要である。

しかし、本研究は、あくまでも一時点としての結果によるものである。先行研究では現場実習後に実習生の能力が飛躍することが示されており、現場実習及び実習後学習の効果や影響が期待できる。そのため、今後の課題として、各実習指導段階において実習生のコンピテンシーの現状を継続的に把握し、縦断的調査によって現場実習の効果測定を含む、2年間にわたる相談援助実習・演習教育の学びの課程に伴う各能力の推移に着目し、現場実習や実習前・実習後学習における相談援助実習・演習科目のシラバスに対してより詳細な知見が得られるようにしていくことである。

付記

本研究の一部は、「コンピテンシーシートにみる実習生の学修の現状と今後の展望－相談援助実習及び相談援助演習をふまえて－」（日本社会福祉学会第63回秋季大会（久留米大学）2015年9月20日）と題し、報告したものである。

本研究は、平成27年度関西福祉科学大学共同研究（一般公募）より助成を受けて行われたものである。

本研究にご協力をいただきました実習生の方々、ご助言ご協力をいただきました先生方におかれましては、心より感謝申し上げます。

註

- 1) 本論では、「知の運用能力」を、修得した知識がそれぞれの場面や状況に応じて効果的に活用できる力ととらえている。

引用文献

- 1) 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会－「中間取りまとめ」－」2006年
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf>（参照：2015. 6. 15）。
- 2) 社団法人日本社会福祉士養成校協会「社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究 平成14年度総括・分担研究報告書」2003年
http://www.jascs.jp/researchpaper/h14sw_practice_report.pdf（参照：2015. 6. 15）。
- 3) 池田雅子「社会福祉実習教育における学生の自己コンピテンシー・アセスメントの活用について：コンピテンシー評価結果の分析を通して」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』42、2005年、49-65頁。
- 4) 藤田久美、山本佳代子、青木邦男「社会福祉教育におけるコンピテンシー評価項目の検討」『山口県立大学社会福祉学部紀要』14、2008年、65-78頁。
- 5) 齋藤陽子、久世均、松本香奈「業種別コンピテンシー診断による高い就職率・定着率を目指す教育－コンピテンシー診断システムを活用した教育の実践－」『岐阜女子大学紀要』41、2012年、135-142頁。
- 6) 加藤恭子「日米におけるコンピテンシー概念の生成と混乱」『日本大学経済学部産業経営研究所所報』68、2011年、46-50頁。
- 7) 前掲論文4)。
- 8) 社団法人日本社会福祉士養成校協会編「相談援助実習指導・現場実習教員テキスト」中央法規出版、2009年、256-260頁。
- 9) 安井理夫、小柴住まゆ子、田崎慎太郎「児童福祉分野のソーシャルワーカーに求められる専門性と人間性：社養協版実習指導ガイドラインの批判的検討」『同朋大学論叢』95、2011年、47-64頁。
- 10) 前掲論文3)。
- 11) 前掲論文4)。
- 12) 前掲資料1)。